

第25期考古学セミナー（2023年度）

－山形県の指定文化財と出土遺跡－

第2回講座

講義③

弥生時代の指定文化財と関連遺跡

(公財)山形県埋蔵文化財センター

菅原 哲文 氏

令和5年10月1日（日）

会場 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館研修室

弥生時代の指定文化財と関連遺跡

山形県埋蔵文化財センター 菅原哲文

1 はじめに

山形県の弥生時代の指定文化財とその遺跡内容について概観する。ここで取り上げる遺跡は、寒河江市石田遺跡、大蔵村上竹野遺跡、酒田市生石遺跡である。また、県内の弥生時代の重要遺跡として南陽市百刈田遺跡を紹介しておきたい。

2 生石2遺跡と指定文化財

(1) 遺跡の概要と山形県による調査

生石2遺跡は、酒田市生石に位置する。最上川の支流、新井田川の上流右岸に立地する。1984・1985・1986年の3次にわたる調査が行われた。奈良・平安時代の遺構が確認された下層に弥生時代の遺物包含層が形成され、第2・3次調査でB・C・E区より弥生土器が出土した。C区からは200個以上が出土した(安部1986・安部・伊藤1987)。C区・E区東側が古く砂沢式期に相当し、B区は弥生Ic期(上竹野A式期)、E区の西部が弥生III期と報告されている。

弥生土器は、砂沢系土器と遠賀川系土器(畿内第I様式中段階)、これらの合いの子ともいえる折衷土器が相伴していた。また、コーン・グロスがあるスクレーパー、粃痕土器、炭化米が出土し、山形県内でも弥生時代前期に稲作農耕文化が受容されていた事が明らかとなった。

当遺跡の弥生土器は、平成23年に県指定文化財となった。鉢27点、高坏4点、甕32点、壺10点、蓋5点の合計78点である。

器種組成は、鉢・高坏・甕A・甕B(深鉢)・壺・蓋である。砂沢系土器の器は、鉢・高坏・甕Bがある。鉢は台形状に開く器形が主で、文様は変形工字文が多く沈線の交点には粘土粒が見られる。高坏は体部中央に屈曲を持ち、口縁部が大きく外反する器形が多く、この地域の特徴と考えられる。甕Bは口縁部が短く外反する器形が多く、体部上が内湾する器が少量見られ、工字文状の文様、変形工字文、平行沈線文が見られる。体部には縄文が施文される。遠賀川系土器は、壺のみである。無文の器面に、平行沈線文を施し沈線間に列点文が連続して入る。調整に刷毛目が施される個体がある。折衷系土器は、甕A・蓋がある。甕Aは体部に縄文が施され、平行沈線文間に列点文が施される個体がある。蓋は、甕用の煮沸用に用いられるものと扁平な壺用の蓋と考えられるものがある。

(2) 酒田市による調査

酒田市教育委員会による1986年の調査で、墓域が確認されている(小野1987)。

弥生時代の土壙墓と粉碎された骨片、粉碎に使われたと考えられる台石、骨を収納した壺棺を埋設した遺構が確認された。土壙は調査区の中央部から北部に集中し、その南側には骨を粉碎したと思われる4カ所の台石遺構や叩石とみられる円礫が出土した。台石周辺には骨粉が大量に散布していた。調査区南側には5個体の壺等が埋設された再葬墓SK25と単独の埋設土器7基が確認された。弥生時代前期の葬送の過程が確認できる貴重な事例である。埋設土器は遠賀川系土器を含み、生石2遺跡C地区出土土器に後続する段階とされる(佐藤2006)。

3 寒河江市石田遺跡と指定文化財

石田遺跡は、高瀬山の東麓にひろがる標高 95m の微高地に立地している。当遺跡は開発によって何回かの発掘調査が行われている(宇野 1994・寒河江市史編纂委員会 2019・山形大学附属博物館 2021)。

大正 10 年(1921)、村山軽便鉄道(左沢線)の線路敷設工事により遺跡の東縁が削られたが、この時、大量の遺物が出土した。縄文時代、弥生時代の土器の他、土偶も出土した。遺物の一部は佐藤吉則氏の手元に保管された。山形大学博物館で保管されている結髪土偶(縄文時代晩期末)もこの頃に当遺跡から発見されたと考えられる。

昭和 25 年(1950)、東北大学伊藤信雄教授により、石田遺跡出土の長胴の甕が弥生土器であるとの指摘がなされた。この甕は大正 10 年に出土した物である。加藤稔氏は弥生時代後期の石田Ⅱ式の型式名を与えた。また同遺跡の前期弥生土器は石田Ⅰ式と呼称した(加藤 1978)。

昭和 44 年(1969)に、村山食品株式会社(現在のサンヨー缶詰株式会社)の工場拡張工事現場から大量の遺物が出土した。山形大学教育学部歴史学研究会考古学班と寒河江高校により遺物が採取された。左沢線の東側は石田 A 遺跡、西側を石田 B 遺跡として登録された(後に平成 27 年の遺跡範囲再調査により石田遺跡として統合)。

石田遺跡 B 地点では、地表から 50cm の深さの黒色土層に遺物が集中しており、その下層に 30~50cm の厚さをもつ泥炭層が確認された。晩期の大洞 B~C1 式期を中心とする土器が出土した。漆塗りの土器も出土している。その他、朱塗りの櫛、木製装身具、食糧となったクルミなどの植物遺存体、遮光器土偶の頭部なども出土している。

昭和 55 年(1980)に石田遺跡 A 地点の畑地で宅地造成工事が行われ、寒河江市教育委員会により緊急発掘調査が行われた。調査では弥生時代の土壇墓と考えられる遺構が 3 基(2~4 号)、平安時代の住居跡 2 基、工事中に発見された土壇墓(1 号)の推定位置も記録された。2、3 号土壇墓からは弥生中期前葉の土器が出土し、1 号土壇内から弥生時代の 2 個体の壺と(寒河江市指定有形文化財)、底部が穿孔されたと考えられる深鉢 1 個体が出土した。2 個体の壺は土坑に死者を埋葬し、骨を拾い再び土器に埋葬した再葬墓と考えられ、加藤による石田Ⅰ式の時期とされた(宇野・佐藤 1983)。

なお、石田遺跡からは 3 点の結髪土偶が出土し、會田容弘氏により分析・報告されている(會田 1979)。いずれも、晩期の大洞 A' 式の前夜とされる。最もよく知られている結髪土偶は、現在、山形大学附属博物館に展示されている。安達家に残る考古資料が寒河江市に寄贈されていたが、その資料の中にあつた土偶の脚は、會田氏により山形大学の結髪土偶に接合する事が指摘され、平成 30 年に左足は寒河江市より大学へ寄贈、令和元年に山形大学のクラウドファンディングにより接合・修復された。

4 大蔵村上竹野遺跡と指定文化財

(1) 遺跡の調査経緯と指定文化財

大蔵村上竹野遺跡は、明治 24 年以降の開拓事業を契機に古くから存在が知られ、大正から昭和にかけて花車円瑞により遺物の採集が行われていた。これらの遺物が山形大学教育学部柏倉亮吉の目に留まる事となり、昭和 27 年(1952)に最上地歴学会、昭和 29 年に山形大学と致道博物館による発掘調査が行われた。柏倉は、当遺跡を縄文文化から弥生文化に移る過程の遺跡として注目していた。犬飼安太郎は上竹野遺跡の土器について考察し、A 類、B 類、C 類土器に分類、A 類は大洞 A' 式土器に併行する型式、B 類は縄文最終末の福浦島下層式に併行する型式、C 類は棚倉式に併行し東北地方の弥生時代最古の型式になるものと考えた(犬飼 1958)。昭和 38 年(1963)には、上竹野遺跡の弥生土

器（瓢型土器を含む4個体）が県指定文化財となった。その後、『山形県市考古資料』（柏倉ほか1969）での弥生土器や石器、土製品、土偶の紹介、最上地方・庄内地方の弥生時代資料集成において、山形大学が調査した弥生土器の紹介（加藤稔・佐藤嘉弘1986）、『大蔵村史』での遺跡の紹介と考察（大友1999）などが行われてきた。また、平成16年に山形大学で保管されている上竹野遺跡出土の弥生時代前期の円筒形深鉢・注口土器・壺形土器の3点が県指定文化財となった。

（2）山形県埋蔵文化財センターによる調査成果

当遺跡の集落跡としての内容が明らかになったのは、山形県埋蔵文化財センターによる発掘調査である。平成27・28年に発掘調査が行われ報告書が刊行された（菅原・三浦・長澤2019）。

縄文時代・弥生時代の集落跡であり、弥生時代は前期から中期初めの時期が中心である。竪穴住居跡が6棟、捨て場5箇所、土坑、柱穴群、集石遺構、土器埋設遺構（再葬墓）が確認され、集落の構成が明らかとなった。竪穴住居跡は、2・4区で5棟が集中して検出され、残り1棟は1区南側の捨て場と重複して検出された。注目されるのは、ST202 竪穴住居跡で、直径は約9m、6段階の建て替えや拡張が行われていた。炉は石囲炉と推定される。5区では、調査区中央の東壁沿いに土坑群が検出され、北端の段丘縁辺近くに弥生時代の再葬墓と考えられる土器埋設遺構群や墓壇と考えられる遺構群が分布する。このうち、土器棺と考えられる遺構が6カ所で埋設土器は8基、土壇墓と考えられる遺構が4カ所、そのうち副葬品と考えられる土器は3基に認められた。主な再葬墓として、SK514 土壇には大型の壺に鉢を蓋とした合口土器棺が2カ所埋設されていた。南側の土器棺には、凝灰岩製の平玉が入っていた。その他、土器棺に翡翠製の玉が納められているものもあった。土壇墓には赤いベンガラ散布が見られるもの、管玉を副葬し土壇上に壺を設置するものなどがあった。

また、弥生時代でも土偶を用いる文化が継承されている。頭部を欠くがその下はほぼ残っている土偶、頭部を欠くが上半身が残存する土偶、他に脚の破片が2個体出土している。その他、新庄市ふるさと歴史センターに収蔵されている、伝上竹野遺跡出土の土偶頭部がある。

当遺跡の2個体の土偶は、特殊な出土を呈していた。頭部を欠く土偶は、捨て場SX60の底近くの層から出土し、仰向けに水平の状態出土した。傍には頸部を欠く小型の黒色壺が出土し、土偶より上層からは弥生時代前期から中期初めの土器などが大量に出土した。土器の廃棄を行う前に、人為的に土偶を安置したものと思われる。体部上半が残る土偶は、SK310 小土坑より出土した。土坑には斜めに石皿が入り、その上に乗った状態で出土している。人為的な埋納と考えられる。

5 その他の弥生時代の重要遺跡—南陽市百川田遺跡—

（1）遺跡・遺構の概要

百川田遺跡は、南陽市大字島貫字百川田に所在する。宮内扇状地の東側の扇央部よりやや下位の、自然堤防上に立地する。縄文・弥生・奈良・平安時代・中近世にわたる複合遺跡である。一般国道113号南陽バイパス改築事業に伴い山形県埋蔵文化財センターにより2003～2006年かけて4次の調査が行われた（佐藤ほか2010）。弥生時代の遺構はF区のVI層面より検出された。遺構は、19カ所の土器集中ブロックが検出した。弥生時代中期後半の、遺物がまとまって出土したブロックは土壇墓に伴う可能性があると考えられている。出土土器の器種は壺が多く、偏った組成を示している。

（2）出土遺物の内容

当遺跡の弥生時代中期後葉の土器であるが、器種は壺・甕・高坏・蓋・鉢で構成される。このうち、壺が53%となり半数以上を占める。また壺は、会津地方に分布する川原町口式に代表される会津系の

壺と、村山系の壺があり量的にはほぼ半々であるとされる。会津系と村山系が共存する置賜盆地に特有の在り方であり、「百刈田式」が提唱されている（佐藤祐輔氏の報告書考察による）。

弥生時代中期後半で墓墳に伴い、完全な形の土器がそろそろセット関係がわかる重要な資料であり、靱痕土器も確認されている。

6 おわりに

県内の弥生時代の指定文化財とその遺跡内容を述べてきた。

東北地方の弥生時代は、土器や祭祀遺物に縄文時代の伝統を残しつつ、稲作やそれに伴う土器文化を受け入れている。稲作は日本海側でその導入が前期から見られるが、内陸部は靱痕土器などが確認され、稲作の可能性が指摘できるのは弥生時代中期以降である。また、県内の弥生時代の水田遺構は現時点で検出されていない。弥生時代の集落跡の調査は、前期から中期前半にかけての事例はあるものの、それ以降は限定的と言える。今後の研究の進展や調査された資料の積極的活用と評価が望まれる。

指定文化財は弥生土器に集中しているが、土器以外でも弥生時代の石器、土偶や土版などの祭祀遺物、玉類などの装身具などの注目される遺物があり指定が今後望まれる。また近年の発掘によって集落内容が明らかになった資料も指定される事が望まれる。

引用・参考文献

會田容弘 1979 「東北地方における縄文時代終末期以降の土偶の変遷と分布」『山形考古』第3巻第2号 pp. 27-43

安部実 1986 『生石2遺跡発掘調査報告書(2)』山形県埋蔵文化財調査報告書第99集 山形県教育委員会

安部実・伊藤邦弘 1987 『生石2遺跡発掘調査報告書(3)』山形県埋蔵文化財調査報告書第117集 山形県教育委員会

宇野修平・佐藤嘉広 1983 「弥生時代の再葬墓址—寒河江市石田A遺跡—」『西村山地域史の研究』創刊号 西村山地域史研究会

宇野修平 1994 「第一章第四節 竪穴住居と集落の構造」『寒河江市史上巻』 pp. 98-127

宇野修平 1994 「第二章第一節 弥生時代の寒河江」『寒河江市史上巻』 pp. 130-143

小野忍 1987 『生石2遺跡 宅地造成に伴う緊急発掘調査の概要』酒田市教育委員会

柏倉亮吉ほか 1969 『山形県史資料編11 考古資料』山形県

加藤稔 1978 「山形の弥生式土器」『北奥古代文化』10 pp. 9-33

寒河江市史編纂委員会 2019 『寒河江市史 別編 考古編』

佐藤庄一 2004 「山形の弥生文化の発展と終末」『さあべい』21 pp. 82-94

佐藤祐輔 2006 「酒田市調査による生石2遺跡出土土器の紹介—生石2B式設定の序説—」『庄内考古学』22 pp. 39-58

佐藤正俊ほか 2010 『百刈田遺跡第1～4次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第184集

渋谷孝雄ほか 2014 『第22回企画展 弥生時代の山形』山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館

菅原哲文 2018 「上竹野遺跡出土の土偶」『研究紀要』第10号 (公財)山形県埋蔵文化財センター

pp. 43-56

菅原哲文 2018「大蔵村上竹野遺跡発掘調査の概要」『続草ぶえの考古学 柏倉亮吉先生を偲ぶ特集号』

さあべい第32号 草ぶえの会・さあべい同人会 pp. 29-43

菅原哲文・三浦一樹・長澤友明 2019『上竹野遺跡第1・2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財セン

ター調査報告書第234集

山形県立博物館 2010『縄文のキセキ—半世紀の時を越えて—』

山形大学附属博物館 2021『山形大学附属博物館クラウドファンディング報告書』

弥生時代の指定文化財と関連遺跡



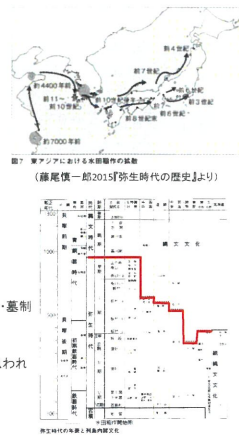
(公財) 山形県埋蔵文化財センター 菅原哲文

1

現在の弥生時代の捉え方

- ・弥生時代の開始年代の問題

以前(約20年前)、BC3世紀頃が弥生時代の開始とされていたが、近年はAMS年代測定の結果により九州ではBC10世紀まで遡るとい結果がでている。
九州北部に稲作農耕が伝来し開始が最も早く、日本海側を北上した。弥生時代の開始は、西日本と東北には時間差があり、西日本が弥生時代でも東北ではまだ縄文時代。
- ・東北地方(山形県)の弥生時代の特徴
 - ・縄文時代からの継続する要素多い。土器に残る縄文、竪穴住居・墓制と祭祀(再葬墓・土偶祭祀が残る)
 - ・県内では水田は確認されていない。また稲作を行っていないと思われる地域もある。金属器がほとんど見られない。国家が未発達。




2

山形県内の弥生時代の指定文化財

今回取り上げる主な遺跡

- ・酒田市生石2遺跡
- ・寒河江市石田遺跡
- ・大蔵村上竹野遺跡
- ・注目される資料—南陽市百刈田遺跡



3

県内の弥生時代遺跡

生石2遺跡(酒田市)

- ・西日本より農耕技術をもった人々が、日本海側を北上しこの地に移住。地元の人々と融和した?
- ・1984~86年に県による発掘調査が行われ、遠賀川系土器と地元の砂沢系土器が出土した。弥生時代前期から中期初め頃の時期。

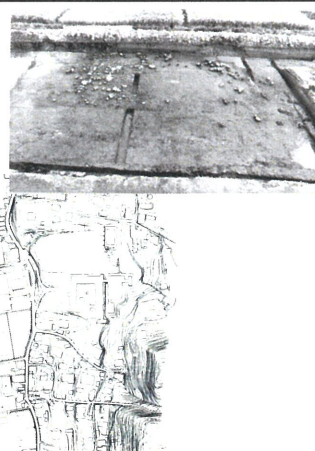


- ・遠賀川系土器 (西日本の影響を受けた土器)
- ・折衷土器 (東北地方の土器)

4

生石2遺跡の発掘調査区

- ・C区の弥生時代の遺物包含層(最も多い)。E区東側。弥生前期
- ・B区、E区の西縁部も出土。弥生前期後半、中期



5

砂沢系土器(東北地方の土器)

縄文晩期の亀ヶ岡式土器の伝統が残る。

- ・鉢
- ・高坏
- ・甕(深鉢)



6



7



8



9



10



11



12

寒河江市石田遺跡の概要

- ・立地—高瀬山東麓にひろがる微高地、標高約95m
- ・開発による調査
大正10年(1921)の鉄道建設工事(現在の左沢線)により、大量の縄文時代や弥生時代の遺物が出土。

昭和44年の工場拡張工事
山形大学と寒河江高校により
遺物が採集。
石田A遺跡、石田B遺跡

昭和55年の宅地造成工事
弥生時代の再葬墓が確認され
た。



13

石田遺跡の現況



14

石田遺跡の出土遺物

縄文時代晩期の縄文土器



遮光器土偶



壊れり土器

15

石田遺跡の結髪土偶

・大正10年(1921)年、鉄道線路(左沢線)の工事に遺跡が
かかり、大量の遺物が出土。土偶も、この頃に出土したも
のか。

- ・會田容弘氏により、『山形考古』に報告された。
- ・縄文時代晩期終末の大洞A~A'式頃の土偶。



修復前の結髪土偶(山形大学附属博物館)

16

石田遺跡の結髪土偶

・寒河江市で保管されていた左足が当結髪土偶と同一であると判明、足は山形大学に寄贈され、接合・修復された。

・修復に伴い、CTスキャンや顔料の分析も行われた。



17

石田遺跡(A地点)の調査

昭和55年の宅地造成工事

弥生時代の初めの再葬墓が確認され
た。(1・2号土壇)

1号土壇から、2個体の壺と1個体の深鉢(土器
棺)が出土した。変形工字文が施される弥生
土器



3 石田A遺跡発掘調査区

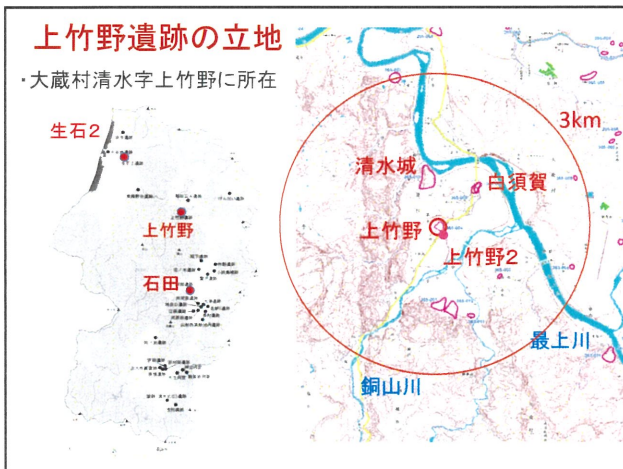
18



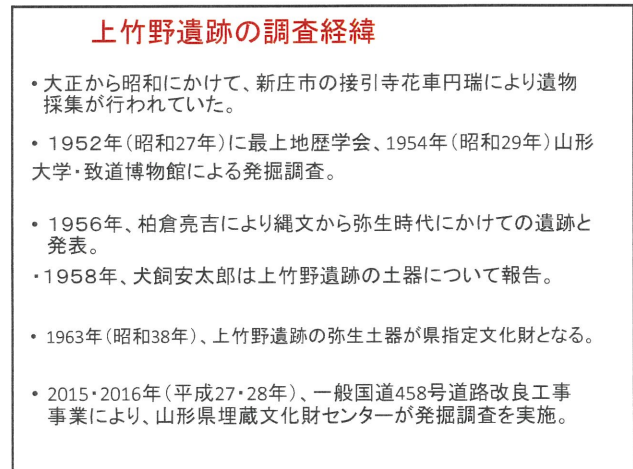
19



20



21



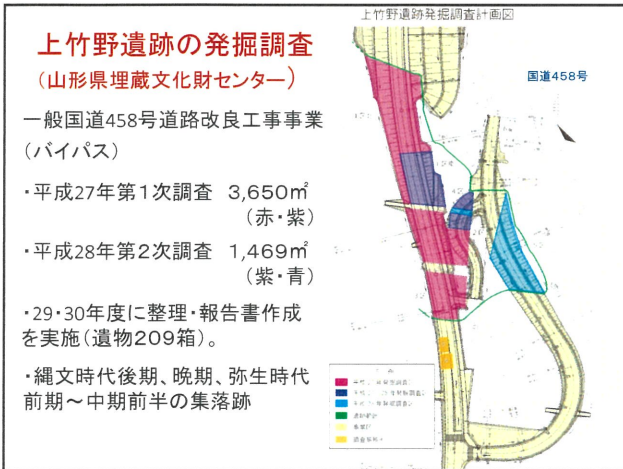
22



23



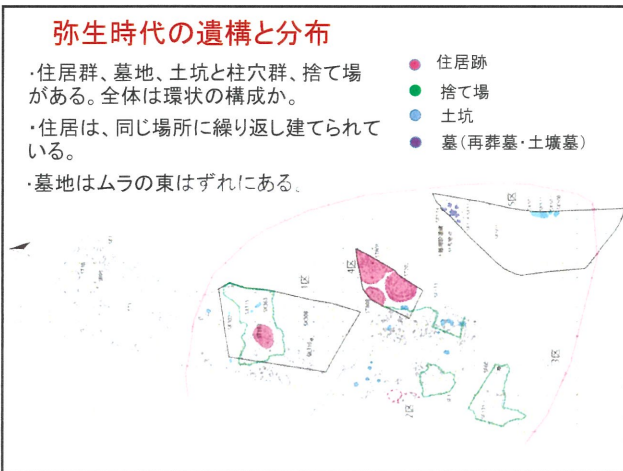
24



25



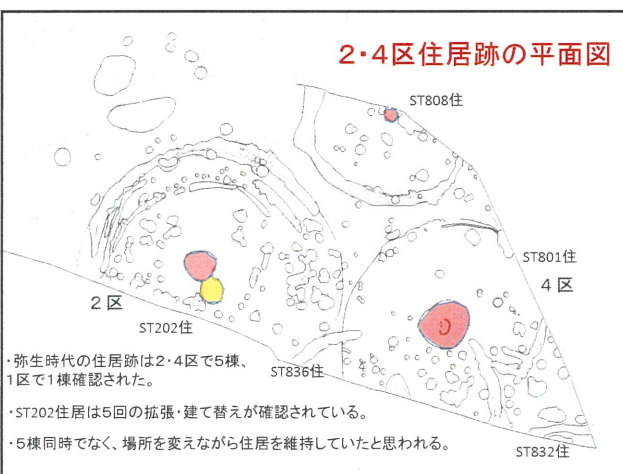
26



27



28



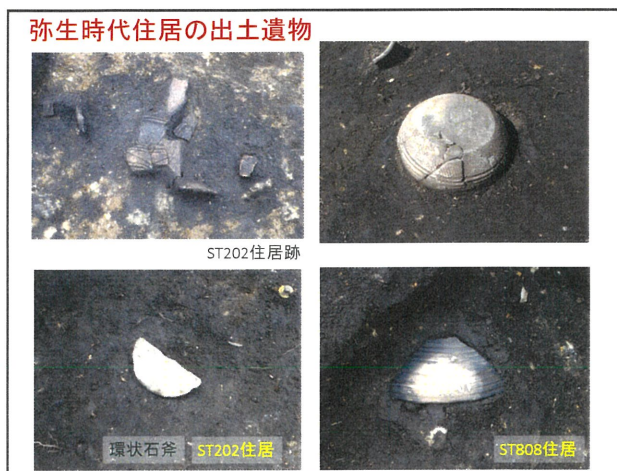
29



30



31



32



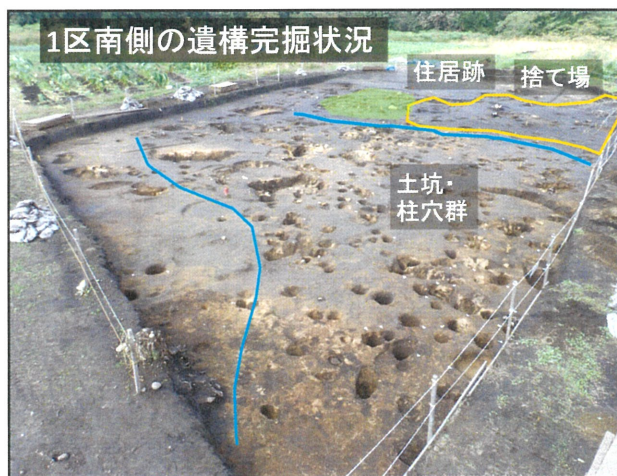
33



34



35



36



1区の弥生時代の捨て場(SF136)

37



SF136捨て場下の遺構・出土遺物

・SF136壺出土状況

・SX315集石遺構

・SX363性格不明遺構

38



5区北端の墓地
(埋設土器群)

9遺構で埋設土器は
11基

39



SK514土器埋設遺構

壺の上に鉢をかぶせた
合口土器棺が2基

40



SK514土坑の合口土器棺

平玉出土

41



SK525(左)・528(右)土器埋設遺構

壺+鉢の合口土器棺
が2カ所

42



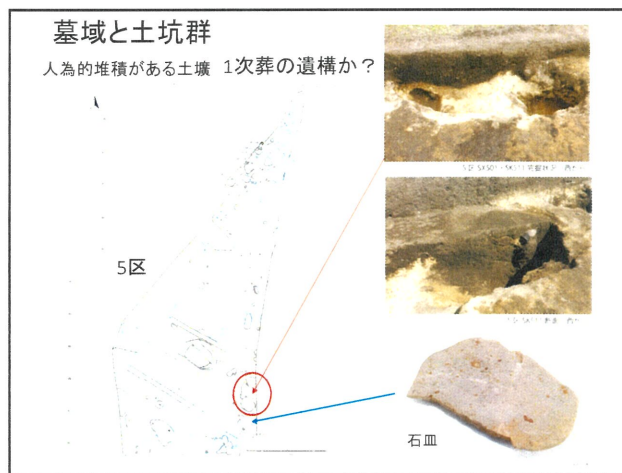
43



44



45



46



47



48

出土した土偶



- ・結髪土偶、刺突文土偶などと呼ばれるタイプ
- ・腰に帯のようなものをめぐらした表現
- ・全体が赤彩されていた。中空の作り。
- ・頭部は釜淵遺跡のように髪を結ったような表現になると思われる

49

SF60出土の弥生土器

- ・弥生時代前期終わり頃から中期初め頃
- ・土器の復元率が高い。
- ・高坏・浅鉢・鉢・蓋(フタ)・深鉢・甕(カメ)・壺で構成される。
- ・鉢、浅鉢は赤彩されるものがほとんど。深鉢なども一部赤彩されるものがある。



50

出土した土偶

SK510土坑石皿の上から出土。埋納された？

弥生時代初め頃か



他に捨て場から足先みのみの土偶が出土。前の調査を含めると土偶は5体存在する。

51

出土した土偶(SK510土坑)



- ・刺突文土偶
- ・全体に赤彩、中空
- ・頭部と下半身は発見されず。

上竹野遺跡出土とされる土偶頭部

青森県程森遺跡

52

上竹野遺跡 その他の祭祀具



石刀・石棒



土版

・弥生時代でも、縄文時代に使われていた祭祀具が続いている

・玉類は、土器棺や墓の中に副葬されていた。ヒスイ製もあり。

玉類



53

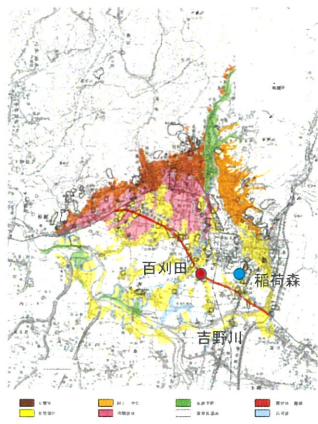
上竹野遺跡の土偶に関して

- ・2個体の弥生時代土偶は、頭部を欠くもの、頭部と体部下を欠くものが出土した。
- ・2個体については、意図的と考えられる埋納行為？が認められる。
- ・埋納の際に、意図的な破壊を行ったかどうかは不明。ただし他の埋納行為を行う事例では、どこかからの箇所の破損が報告されている。
- ・捨て場を設定する際の儀礼？モノ送りと再生的な意味合い？
- ・石皿と土偶との意味(生み出す?)

54

南陽市百刈田遺跡

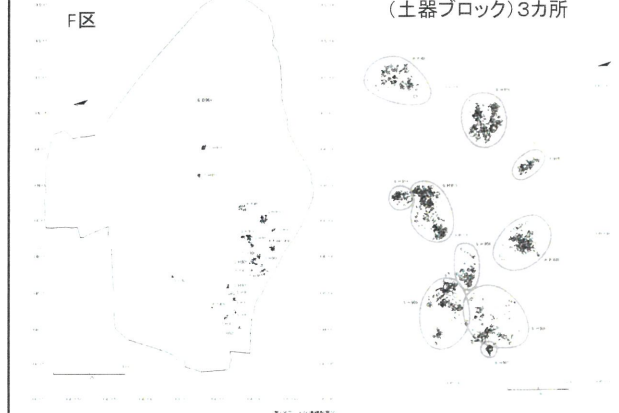
- ・一般国道113号改築事業
山形県埋蔵文化財センターによる2003～2006年の発掘調査。
- ・縄文～中近世に至る複合遺跡。
- ・宮内扇状地の自然堤防上
- ・弥生時代の遺構面は、奈良・平安時代の遺構の下より検出。地表下50cm。



55

百刈田遺跡の弥生時代遺構

- ・SH(墓)が16カ所。RP(土器ブロック)3カ所

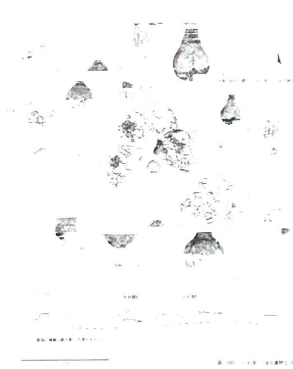


56

墓とされる遺物ブロック

- ・掘り込みは確認されず。壺が多い。

- ・SH905遺物出土状況



57

SH905出土の弥生土器

- 壺5・甕3・高坏1・蓋2点出土。

壺は一本描き施文具による渦文が多い。重菱形文も。



58

SH916出土の弥生土器・石器

- ・壺4、甕2、高坏1ほか
- ・壺、1本描き施文具による渦文や重三角文
- ・太型蛤刃石斧



59

おわりに

・弥生時代の指定文化財となっている遺物は、学史的に著名な遺跡に由来する弥生土器に集中している。



指定遺物の出土遺跡の、他の種類の遺物(石器・祭祀具など)も弥生文化を理解する上で重要である。追加して指定はどうか。

発掘調査で、地域の弥生文化の内容が詳細に把握できるようになった遺跡の遺物も指定してはどうか。

山形県内の弥生時代、弥生文化研究も、推進されることが強く望まれる。(不明な点が多い)

(稲作、水田の導入の実態、農耕具は？ 中期～後期の集落の様相は？)

60